

ムージルの『生徒テルレスの惑乱』について

——作品解釈の試み——

長谷川 淳基

Zu Robert Musils Roman „Die Verwirrungen des Zöglings Törleß“

—Eine Interpretation des Werkes—

Junki HASEGAWA

始めに

「私が自分の運命を信じたことはうかつでした。」ムージルが亡命先のチューリヒからアメリカにいるトーマス・マンに宛てた手紙の一文である。その手紙はムージルと妻マルタがイタリア経由でチューリヒ入りし、やがて二カ月が経過しようとする時期、すなわち1938年10月28日に書かれた。

スイスでのその後のムージルの過酷な生活について、そのなにがしかを知る我々すなわち現代の読者からすると、この言葉はムージル自身による彼の人生の総決算のそれのようにも思える。もともと手紙全体の主旨からしても、またムージルのこの時期の諸状況を考えても、ムージルはそうした意図でこの言葉を発したのではないことは明かである。とはいえ、総決算の言葉でなくとも、ある時期の内省から出た言葉であることは自明であり、それが不幸にも、悲しむべきことにムージルの人生を総括する言葉の一つとなってしまった、ということである。

ムージルは、何時そしてどのように、「自分の運命を信じた」のだろうか？ 人が自分の運命を信じるとは、どのようなことか？ それは作品の創造とどう関わり合うものなのか？ 以下、本論ではムージルの処女作『生徒テルレスの惑乱』における語り手の分析からこの問題を考察する。

第一景 ロマーン『生徒テルレスの惑乱』 小説の全体像

1906年12月21日、この日はムージルの人生で特別の一日である。出版されたばかりのムージルの処女作『生徒テルレスの惑乱』について、ベルリン随一の批評家ケルがこの日の「ターク」紙に長文の評論を発表したのである。内容はムージルの作品を激賞していた。ムージルはこの日に作家となった。

『テルレス』の出版を引き受けたウィーン出版はやがて会社を畳んでしまったが、1911

年からはミュンヘンのゲオルク・ミュラー出版が、1914年にはS.フィッシャー出版がこの作品を引き継いだ。その後『テルレス』については、1931年にローヴォルト社がミュージル存命中の最後の版を出した。

その後の版はこの1931年の本を元としたものである¹⁾。これら諸版がある『テルレス』ではあるが、内容に関わる大きな書き換えはない。が、形の上からは最初の二つの版とその後のものでは目だって異なっている。即ち初版『テルレス』では作品全体が29章に分けられ、それぞれの章は新たなページから始まっている。

手元にあるいわゆる新刊二巻本のミュージル著作集ではこれらの章の切れ目を、行間二行をとって明らかにしている。

作品全体の流れを理解する上でも、また本論の叙述にも都合の良い区切りなので、上記新版でのページ数と各章の始まりの表現を以下に記す²⁾。

- 1章 S. 7-18
- 2章 S. 18 二人は喫茶店に立ち寄った
- 3章 S. 26 つい今しがた小雨が降ったに違いなかった
- 4章 S. 36 「おい、あいつをつかまえたぞ」
- 5章 S. 50 次の日、バジーニは管理下に置かれた
- 6章 S. 50 その後数日のあいだは、この事件は
- 7章 S. 53 テルレスはあるとき夜中に—— [...] ——揺り起こされた
- 8章 S. 61 それから数日は決定的なことはなに一つ起こらなかった
- 9章 S. 66 翌日、バイネベルクとライティングが一緒にいるところに
- 10章 S. 68 10時45分にテルレスは、バイネベルクとライティングがこっそり
- 11章 S. 73 数学の授業中、不意にテルレスにある考えが浮かんだ
- 12章 S. 74 その日のうちにテルレスは数学の先生に
- 13章 S. 78 そのあと一日中、テルレスはずっと動揺した状態にあった
- 14章 S. 80 だが次の日にはもうひどい幻滅に襲われた
- 15章 S. 84 テルレスは晩ベッドに入ってもなかなか眠れなかった
- 16章 S. 88 だが翌朝、彼が目覚めたときに思ったことはそのことであった
- 17章 S. 92 しかしカントのエピソードは、ほぼ克服されたと言ってもよかった
- 18章 S. 94 二日続きの休日がやってきた
- 19章 S. 96 その夜、テルレスは危うくバジーニを襲うところであった
- 20章 S. 106 ようやく彼はベッドに横になった
- 21章 S. 108 火曜の夕方に生徒達の第一陣が帰ってきた
- 22章 S. 114 それは数日後、彼ら三人が例の部屋に集まったときに起こった
- 23章 S. 119 テルレスは逆らいもせずその夜が近づくに任せた
- 24章 S. 122 ベッドの横になった時テルレスは、終わりだ、と感じた
- 25章 S. 126 翌々日の午後に早くもライティングとバイネベルクが
- 26章 S. 129 翌日になってもバイネベルクとライティングは、その日を
- 27章 S. 131 テルレスに対しては誰も嫌疑を抱かなかった
- 28章 S. 132 翌日、寄宿生達が一人ずつ尋問に呼び出されたとき

29章 S. 139 バジーニはその間に放校の処分を受けていた

10ページを大きく超えるような長い章もあれば、半ページに足りないような短い章もあって、各々の章は長短それぞれである。

グロスマンは作品の筋立てを理解するために、これら29章を大きく四つに区切っている³⁾。彼の意見に従うと、

1-3章 導入。生徒テルレスの両親が寄宿舎にテルレスを訪問し、再び帰って行く。テルレスがこれまでの寄宿舎生活を回想する。バイネベルクとテルレスは娼婦ボジェナのところへ立ち寄る。

4-17章 小説の中核部分の前半。同級生バジーニの盗みが発覚、ライティングとバイネベルクによるバジーニへの虐待。知性にまつわるテルレスの戸惑い・惑乱。数学、虚数、カントについて。

18-26章 同じくその後半。寄宿舎の休暇を機にテルレスとバジーニの接近。テルレスの道徳上の惑乱、少年同士の性愛。バジーニへの虐待のエスカレート。ライティング、バイネベルク、テルレス三人のグループからのテルレスの離反

27-29章 最終局面。テルレスの逃亡、教師達による事情聴取。テルレスが憑かれたように考えを吐露する。学校からの退去、母親による出迎え。

ざっと以上のようにストーリーが展開する中で、テルレスの心の動きが小説全体を通して詳細に描写される。心理学との関係が議論される由縁である。

第二景 小説の構造 あるいは、その後のテルレスについて

作品は、テルレスがこの学校を退学することになり、辛い気持ちを抱いて母親がテルレスを迎えにやって来たものの、意外にもそこには落ちついて平然としている息子の姿があり、ほどなく駅へ向かってそぞろ歩く二人の姿が描き出され小説の幕となる。

実質、放校処分のような形で退学したテルレスではあるが、彼はその後いかなる人生を歩むのであろうか？

以下この問題について考えてみたい。

話の順序として、テルレスにこうした処置が下されることになった経緯を見て置こう。

バジーニの事件が明るみ出た直後にテルレスは寄宿舎から失踪した。寄宿舎に連れ戻されたテルレスは失踪の理由、バジーニのことなどについて、校長を筆頭とする教師会の事情聴取を受けることになる。この教師会を構成するメンバーは校長の他、クラス担任、宗教担当の教師、そして数学の教師であった。テルレスはこの場で、今や自分がたどり着いた精神的な高みから自らの世界理解について、言葉を尽くして説明をする。かつて虚数の存在を知って感激したテルレスは、この数学の教師を訪問したことがあった。虚数の存在を、自身の前に暗い謎として漠然と存在していた世界の明らかな現出ではないか、謎を説く解答がついに得られるのではないかと燃えるような期待を抱いての訪問であった。数学の教師はテルレスの質問に、「もともと私にはそうしたものに関与する資格は全然ないの

です」と自らの数学者としての立場を強調し、「だから数学に関して言えば、そこにあっても自然の単に数学的な関係のみが成立しているのだということは全く確かなことです」(P, 77) とテルレスの質問の真意に理解を示さなかった。

どの教師もテルレスに悪意をもって接しているわけではなかった。宗教の教師もそうだった。テルレスの難解な言葉の奔流に、それでも「魂」なる言葉を聞き逃さなかった彼は、「それでは君は […] 自分が科学から離れ、宗教的観点へ近づいたのを感じたのですか？

[...]」(P, 135) とテルレスを信仰の受け皿で受けとめるべく発言をする。この考えは、教師会のいずれのメンバーにも納得がいく着地点を示していた。しかしテルレスは譲らなかった。今や、教師達はテルレスにとって「滑稽な人物達」(P, 136) であった。そして「びっくりしている周りの人々の顔つきなどは気にも留めず、いわば自分一人のために、このような話を口切りに、テルレスは視線を真直ぐ前に向けたまま一気に終わりまで喋った。」(P, 137)

テルレスの「[...] 途方もない興奮に駆られてほとんど詩的な靈感に見舞われたとでも言える一瞬に、苦もなく自明のように彼の口をついて出た言葉 [...]」(P, 137f) は、あるいはテルレスの側からの自主的な退学届であったかもしれない。テルレスの退学を取り決めたのはもちろん教師会であり、「[...] 誠実な校長の当を得た提案」ではあったが、それはテルレスの意志表示を受けての結果とも言えよう。

小説の最後の場面。テルレスは母親と駅に向かって歩いて行く。

さて最初の問題に戻ろう。

その後のテルレスはどうなるのであろうか？

先に引用したグロースマンが「主人公の分析」を展開する中で、「認識の獲得と自己発見」という項目を設け、テルレスの将来に言及している。その主張を聞いてみよう。

「この小説の結末は開かれたままである。直観的・神秘的体験へのテルレスの能力は、彼に他の人生の可能性について予感させるものであった。しかしながらそれらの知覚は未だあまりにも脈絡がなく、またあまりにも彼自身の危機と結びついていたので、そうした知覚が彼の将来の発展に決定的な影響を及ぼすものとはなりえなかった。新たな倫理的方向を見いだすための基礎ともなり得るこの能力にしても、その先も彼から失われたりすることがないのかどうかは確かではない。[...] その一方で、テルレスのその後の人生を先取りしているくんだりから明らかなように、テルレスが自身の惑乱の克服と、制度的限定を伴う教育規範に対抗する自己主張により獲得した自らの独立は、既存の社会の生活に積極的に参加することを通して、何らかの形でこの社会の変化に影響を及ぼすための準備には変わり得ないものである。」⁴⁾

要はテルレスの将来は不明だと、グロースマンは言っているのである。彼の作品分析である。グロースマンの主張にある「テルレスのその後の人生を先取りしているくんだり」をあらためて見てみよう。

先の章立てを使うと21章、その後半部分にある文章がそれである。2ページに渡る文章の全文を引用したい箇所ではあるが、若干の直接引用と要旨を述べることで済ませることにしよう。「テルレスはこの少年時代の出来事を克服した後では、大層繊細で感受性鋭い精神の若者となった。こうして彼は、繊細な魂のできごとにはおよそ縁遠い粗野なことがら

を考えなくても済むという理由で、法律を、そしてまた少しは公衆道徳をも尊重して心の安らぎを得る、かの美を解し、かつ知的な人物達の仲間入りをしたのであった […]」

それ故に、こうした人たちにとっては、自分たちの道徳的な折り目正しさが要求しないような事物は全くどうでも良いのだ。だからテルレスは、晩年になっても、あの当時起こったことを一度として後悔したことはなかった。彼の欲求は文学的方面に偏り、研ぎ澄まされていたから […]」(P, 111f.)

職業名は明らかにされていないが、後年のテルレスは芸術ないしその隣接分野に携わったことが語られている。またそうした後年のテルレスについて非社会的な人物をイメージすることも誤りである。なぜなら、成人したテルレスは、人間が「良き存在ではないもの nichts Besseres」(P, 112) の場合に、常にこうした人間を軽蔑したからである。もっとも、テルレスのそうした軽蔑の気持ちは何らかのグループのメンバーに共有されて存在するものではなく、彼個人の魂によって下される判断であった。すなわち、良き存在か否かは他者との関係で言われることではなく、自分が自身についてのみ判定する事柄なのである。

善は他者の目を通して善であるのではない、との考えを非社会的と決めつけることは誤りである。今ここで、抽象的な言い回しをする必要はない。成人したテルレスの考え方に耳を澄まそう。「彼は豊かで生き生きとした魂の生活を営む人が、他人に窺い知ることの許されない瞬間や、秘密の引き出しにしまわれている思い出を持つことは、止むを得ぬことだと見なしていた。彼がそうした人に望んだことは、彼らが後になってそれらの瞬間や思い出を繊細のものとして扱うようになってほしいということだけだった。」(Ebd.)

テルレスは何かのグループを代表して意見を述べているわけではない。世界の在りようを模索する人間には、そうしたことは無縁である。こうした後年のテルレスの生き方、その考えは、人間存在の根本からの他者への呼びかけであり、その限りではテルレスは自ら到達した認識に従ってその社会的存在としての役割を十全に果たしている、と言える。

グロスマンの考えについての吟味は以上にして、小説の「語り手」、すなわち上の引用文の発話者について少し考えてみよう。

この作品における語り手は誰か任意の第三者ではなく、著者その人に重なるとする見方は広く認められている。「語り手」についての様々ある一般的な課題の検討は別の機会に譲るとして、今は『テルレス』の語り手がテルレスのその後について、その人生の詳細を知り、かつその価値評価にまで踏み込んでいることを確認しておくことで事足りるとしなければならぬ。上の引用した場面の続きである。成人したテルレスが友人に自らの少年時代の体験、すなわちバジーニに関連したこと、それに伴う魂の問題を語る。

「[…] これらの連れ立った恋人たちのように、あの当時ぼくはぼく自身と手を携えて、こうしたすべての中を通り抜けて行ったのだよ。」

テルレスは後にこんな風に批評したのであるが、しかしながら、あの当時、彼が孤独で肉欲の感覚の嵐の内であった時には、このような良い結末を確信した気持ちがいつも彼の心の中にあった訳では決してなかった。(下線は筆者)

テルレスは少年時代の孤独な精神的危機を「ぼくはぼく自身と手を携えて」と説明する。

それに続く語りの文に注目したい。今のテルレス、すなわち成人したテルレスを語り手は全面的に肯定している、いや危機を乗り越えてきた彼を祝福さえしている。

もう一度グロスマンの言葉にこだわって先へ進もう。ロマーン『生徒テルレスの惑乱』は「開かれて」はいない。

第三景 『テルレス』あるいはオーストリア＝ハンガリー帝国の小説

『テルレス』をオーストリア＝ハンガリー帝国の歴史的現実を反映した小説だと考え、分析しているのはマッテנקロットである⁵⁾。その意図はこうである。「以下の研究では、ムージルの『テルレス』における「主観的要因」が追求されるのであるが、その場合に、感覚知覚の変化の一般的プロセスから——同時代の生産諸関係の発展状況に基づくものであるが——、このロマーンの細部のすべてを「演繹」したいとの希望を抱いているわけではないのであって、本意とするところは、このロマーンに支配的な感覚知覚のひな型を理解するとともに、知覚形式——ここではムージルのそれ——の文化的嗜好に対する経済的、政治的並びに社会的条件を問うことである。」⁶⁾

ある社会的現実があつて、ある特定の作品が生まれてくるというのではなく、ある特定の作品に社会の現実を確認しようというのである。作品の第1章でテルレスによって回想される彼自身と公子との挿話について、マッテנקロットが比較的長い分析を展開するが——そこではテルレスの心に「いつまでも」残る過去へのあこがれが確認され、強調されている——その分析に続いて、「このエピソードが1900年当時のオーストリア中産市民層の気分を、まさしく特徴的に教えてくれるものでなければ、私としてもこの挿話にこれほど長い考察を加えることはしなかった」⁷⁾とする彼の言葉はそうした考えに対応している。

もう一言付け加えよう。本論第一景に記した『テルレス』の章分けの第一章、テルレスは両親を駅へ送って行く。友人達も一緒だった。その帰り道の情景描写である。

若者達の一団が低い構えの小屋のような家並みの間に差し掛かると、先ほどの鬱陶しい物思いもテルレスの胸から去った。彼は、突然興味にとらわれたように頭をあげて彼らが通り掛かった小さく、汚い建物のむっとする内部を目を凝らして覗きこんだ。

たいていの家の戸口には女が立っていて、粗末な肌着に上っ張りを引っ掛け、汚い足を広げ、日に焼けた腕を剥き出しにしていた。

女達が若くてびちびちしている場合には、スラブの野卑なからかいの言葉が彼女らめがけて幾つも投げ掛けられた。すると彼女らは互いにつつき合って、「紳士の卵たち」のことをくすくす笑った。[…](P, 17)

マッテנקロットの主張と、例えばこの描写を突き合わせてみると、彼の言わんとする点になるほどと理解できるように思う。

その論の結びのくだりで、彼はこう繰り返している。「ムージルはテルレスの体験を描写する。しかしこの描写の遠近法は同時に解体局面にあるオーストリア＝ハンガリー帝国での体験形式をも明確に表現している。これについては、テルレスの『疎外』を引き起こす原因としてムージル自身によって設定されたテルレスの個人的要因が、非独占資本家たる

中産市民の社会学的認識から解説を加えられるとき、すでにその時点で確かなものとして彼の視野にとらえられていたものなのである。⁸⁾この小説にはムージルの意図とは別に、読み取ることのできる内容が盛られており、それは小説の語りにも現れている、というのである。ある文芸知識人の疎外の心情を描いたこの作品は、その時代の市民層の意識を正しく射程の中にとらえているからこそ読み継がれる価値を有している、との結論で論文は締めくくられる。

こうしたマッテンクロットの分析と、ブダペスト在住の研究者ポーク・ロヨシュの「『既成の世界観』という厄介なお荷物が見あたらない理由は、実のところ作者と、そして『テルレス』の主人公たちの年齢のせいでもある。オーストリア＝ハンガリー帝国における諸々の関係に対しての、そしてそれら諸関係から有益なものを摂取しようとする精神的態度に対しての直接的反応の欠如は、明らかに彼の体験の不十分さに原因がある。しかしながらロマン『テルレス』に組み込まれている美学と心理学は、この世界からのみその色彩と動機とを獲得することができたのである。『テルレス』の時期——さらにいうと、第一次大戦が終わるまで——ムージルはほとんど全くと言っていいほど、オーストリア＝ハンガリー帝国の政治、社会の問題に関心を持たなかった。この国についてムージルは決して反対の気持ちを抱いてはいないのであるが、とりわけ今日の考えからすると、彼が例えば国民問題の重要性を全く認識していない点などは、正直驚くばかりである」⁹⁾との意見は決して矛盾するものではない。

つまり両者は、『テルレス』の真実性について前者は肯定的に、後者はいささかの不満を示しながらも、これを認めているからである。こうした意見を踏まえた上で、再度「その後のテルレス」について考察しよう。

第四景 結び あるいはテルレスのその後について

その後のテルレスに、先に言及したような場面が訪れるのであろうか？ 成人したテルレスが友人に自らの恥ずかしい体験を語って聞かせる場面のことである。果たしてテルレスは芸術家か何かなるのであろうか？ つまり、小説に描かれた世界は実現するのか？ あるいは実現したのであろうか？

こうした疑問の提出は、あるいは議論の混乱なのかも知れない。しかしマッテンクロットとポークの意見を聞いた今、あらためて「その後のテルレス」について考えようとする、果たして「語り手」は何をどこまで知っていたのかとの疑問、疑いを抱かざるをえないのである。

先のマッテンクロットの論は、テルレスの経験にまつわる描写はオーストリア＝ハンガリー帝国の解体時期における経験の型を写し取ったものだとの結論に達する。ここでは小説の真実性についての指摘がなされている。

「語り手」についての筆者の先の疑問は、彼の指摘する小説の真実性とは次元を異にする問題である。重ねて問おう。「語り手」に付随している世界認識・人間理解への絶対的な自信は、第一次大戦を体験した後も微動だに揺るがないものなのか？

この疑問は作者ムージルにのみ尋ねることができるのかもしれない。テルレスのその後の人生は、果たして作者ムージルが想定した通りになったのか、あるいはなりえたのか、と。

おそらくムージルは、首を横に振るのではなからうか。

こう想像する理由は、「語り手」はテルレスの人生を余りにも「信じている」からである。

思想の展開の徹底さ、その独自性。何事も起こりうるという認識とその分析。そして第一次大戦。世界理解を目指し、これを描き切ったかに思えた小説はこの戦争により、その理解像の一部分が否定される。ムージルのその後は、やがてその否定された部分の修正・回復を計ることになる。その作業こそはライフワーク『特性のない男』への取り組みであった。

注

ムージルのテキストは以下のものを使った。

Musil, Robert: Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiographisches, Essays und Reden, Kritik. Reinbek bei Hamburg 1978 (P と略記し、その後にページ数を記す)

- 1) P, 173
- 2) Großmann, Bernhard: Robert Musil, Die Verwirrungen des Zöglings Törleß, 1984 München, S. 108
- 3) Ebd., S. 16
- 4) Ebd., S. 50
- 5) Mattenklott, Gert: Der „subjektive Faktor“ in Musils ‚Törleß‘. Mit einer Vorbemerkung über die Historizität der sinnlichen Wahrnehmung (1973/76), in: Robert Musil. (Wege der Forschung, Bd. 588.) Hg. v. Renate von Heydebrand, Darmstadt 1982, S. 250–276
- 6) Ebd., 258
- 7) Ebd., 264
- 8) Ebd., 276
- 9) Pók, Lajos: Musils „Törleß“-Roman und die österreichische Kultur an der Jahrhundertwende, in: Die Übersetzung literarischer Texte am Beispiel Robert Musil. Hg. v. Annette Daigger und Gerti Militzer, Stuttgart 1988, S. 167